
床屋だと思ったらソードマスター角田信朗だった件について

日向あおい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

床屋だと思ったらソードマスター角田信朗だった件について

【Nコード】

N1334Y

【作者名】

日向あおい

【あらすじ】

タイトルの通りの内容。ちなみに実話。

（前書き）

実際に起こった出来事を有りのままに書いているだけなので小説では無く日記に近いと思います。

床屋だと思って入った店の主人がソードマスターな上に角田信朗だった件について話をさせてくれ。

あれは2011年11/01の火曜日のことだった。

自宅の給湯器が壊れて温水が出なくなり三日ほど風呂に入れていなかった俺は、ちょうど髪も長くなってきたし散髪ついでに髪でも洗ってもらうか。などという軽い気持ちでバスに乗り、行き着けの美容院に向かうこととした。

今思えば、ここで温水を諦めて素直に冷水で髪を洗っていたらこんなことにはならなかったのではないか。そう悔やんでさえいる。

目的の場所へと向かう道中は特に何事も無く、バス停を降りてからテクテクと歩いて目的のビルの前にたどり着いた俺はエレベーターに乗り込み美容院のある3階のボタンを押す

「あ、あれ？」

エレベーターが動かない・・・最初は力加減の問題なのかな？と色々と試してみたものの、何度押しても3階のボタンが反応しないのだ。

高橋名人顔負けのスピードで連打しても3階のマークは一向に点灯せず、

ため息まじりに4階のボタンを押してみると、これまでの苦勞をあ

ざ笑つかのようにすんなりとエレベーターは動き出した。

3階よ。私に何の恨みがあるのだ。そして何故このビルには階段が無いのだ。

暫くして4階につき室内を見渡す。どうやら雀荘のようだ。タバコの臭いと体臭の交じり合った嫌な臭いに顔をしかめながら暫くボーっとしていると

受付にいたお兄さんがこちらに気が付いた。ここで何か話さないと不自然に思われる。

そう思って恐る恐るガラの悪いお兄ちゃんに3階ボタンが反応しない件に聞いてみた。

俺「あ、あの・・・3階・・・押せない・・・んですけど・・・」

どう見てもコミュ障である。すると

受付「今日あそこ定休日でしょ（苦笑）」

そう笑いながら返された。人間見た目で判断したらあかんーなどと感じながら慌てて美容院の会員カードを確認してみると、なるほど確かに火曜日は定休日のようなのだ。

受付のお兄ちゃんに一言礼を述べた後、俺は逃げるようにしてそのビルを後にした。

そうか、休みだったから3階は反応しなかったのか。行きつけの店の定休日を忘れるとは、己は何て愚かだったのだろう。

しかしここで諦める俺では無い。表通りには見た感じ他に床屋らしき店は見当たらなかった。なので仕方なく裏路地に入り暫く床屋を探した。

そしてそこで見つけたのが「床屋アポロ」である。

名前からして胡散臭い上に店の見た目もボロボロの廃屋のよう。人目につかないようなこんな場所に何故床屋があるのかとても疑問に思つたものの

店の前に置かれていた渦巻く円柱は確かに床屋でよく見かけるものである。

それならばと、意を決して店内に入ったものの働いている従業員の姿はどこにも見えなかった。客の姿も特に見当たらないようだ・・・いや、１人だけいた。

ムキムキで肌の黒い角田信朗似のおっさんが1人、順番待ち用の席に座っていた。

(な、何なんだこの店は……やっぱり諦めて帰ろうか……)

こんな凶悪面で塗装工のような格好をしている客を待機席で待たせておく店なんて信用ならん。

そう思つて店を後にしようとした瞬間だった。突然順番待ち席にいた客が吼えた。

[illegible]

！？ 突然の咆哮に驚き固まっていると、唐突におっさんは立ち上がり俺の肩をがっしり掴んでこう言った。

角田信朗「お客さああん。手前の席へどうぞおおおお？」

なんとこのおっさん、客ではなく店主だったようだ。

あまりのおっさんの迫力に「もう帰ります」などとは言つことは勿論できず、半ば強制的にチェアーに座らされ・・・いや腰からチェアーに叩きつけられた。

俺「え、あの・・・えっと」

戸惑う俺の言葉には耳も貸さず、黙々と服の上に切った髪がかからないようにつける合羽みたいなアレを三枚ほど俺の体に巻きつけている。

いや、何で3枚も巻きつけたし・・・一枚でいい上にすげえ暑い

俺「あの・・・何で三ま・・・」

角田信朗「どのくらい斬りますかああああ？お客さんんんんんん？」

もはや脅迫だった。

俺「ま、前髪は目に少しかかるくらいで・・・後ろは襟あたりまでお願いします・・・」

角田信朗「上の方も何か癖毛になってるんでえ斬ってもいいですよ
ねえええ？」

俺「はい・・・」

不安でたまらなかったが、いくらこんな怖いおっさんとはいえここ
は所詮床屋。サービス内容は普通なんだろう

そう思っていた。そう信じていたんだ。

俺はそこで考えることを放棄して目を閉じた。

一方の角田信朗は暫く霧吹きで俺の髪濡らし弄んだ後

角田信朗「切りますよおおお」

そう言って散髪を開始した。

ギギギ・・・ジョイン！ ギギギ・・・ジョイン！

とてもハサミで髪を切っているとは思えない音が辺りに鳴り響く。
そして何故か音が鳴る度に髪が引っ張られてとても痛い。

ハサミで切られているというよりノコギリで無理やり髪を削ぎ落と
されているような感覚だった。

それが暫く続いてとうとう我慢の限界がきた俺は、ここは客として
文句の一つでも言わねばならないと思い、閉じていた目を開いて鏡
越しに角田信朗を見る。

そこで・・・衝撃の事実を目の当たりにしてしまった。

俺「なっ・・・」

散髪に使用していたのはハサミでは無かったのだ。その手に握られていたのは怪しく光る細長いナイフのような刃物だった。

あまりの事実に驚き、呆然としている間にも角田信朗は容赦なく人の髪を掴んでは手にしたナイフで斬り落としていく。

声を出したら殺られる。そんな危ない目をしていた。

結局俺は何も言うことが出来ず稀に刃先が頭皮に当たる鋭い痛みに絶えながら角田信朗に身を任せた。

何も言えない自分が悔しかった。情けなかった。強姦されるというのはきつとこんな気持ちなんだろうな何て思ってもいた。

それから暫くして角田信朗がようやく動きを止めた。ついに終わったのか・・・と安堵の表情を浮かべて再び鏡を見ると

角田信朗「これくらいですかねええええ」

そう言つてドヤ顔をしている角田信朗。そして余りにも酷い髪型をした俺がそこにはいた。

前髪は目にしかかる程度と注文したはずだったが眉毛の上まで切られ、後ろも側面も酷い有様だった。

俺は泣いた。しかし悪魔の攻撃はまだ続いた。

角田信朗「シャンプーしますねええええ？前かがみになってくださいいいいい」

まだ続くのか・・・と思いながらも逆らったら何をされるか分かったものでは無いので目の前にある洗面器に向かって前かがみになる。

俺「なり・・・ました」

角田信朗「もつと前かがみにですよおおお!!」

そういつて角田信朗は俺の頭を洗面器に叩きつけた。顎がすげえ痛かった。

俺「おお・・・お・・・」

角田信朗「目え閉じてくださいねええええ？」

悶絶している俺には目もくれず水道水で俺の髪を濡らしシャンプーを塗り始める。水は冷たかった。

結局冷水で洗うことになるなら大人しく家にいればよかったと俺は泣きそうだった。

角田信朗の手はザラザラしていて人間味がなく、爪が伸びていて洗われているというより掻き毟られているような感覚だった。

刃先で傷つけられた頭皮はさらに痛んでいく。

そうして再び行われた拷問を耐え抜いた後、前かがみになっていた俺の体をガシッと掴み再び腰からチェアーに叩きつけ

これでもかというほどガシガシと力強くタオルで頭を拭かれた。

そして洗い落としきれなかった頭髮が付着したタオルを手にして角田信朗き俺の前に立つとこう言った。

角田信朗「これでお顔でも拭いてください」

俺は切れた。

勿論抵抗しようものなら何をされるか分からなかったので、大人しくタオルを受け取った後、

料金の1600円を財布から取り出してタオルに包み、それを床に叩きつけて店から逃げ出した。

切ったばかりの頭は風が拭くたびにヒリヒリと痛んだ。バス停まで歩いていく途中、目に入る人全てが俺の髪を見ているような気さえた。

そして今にいたる。

俺はこの経験を一生忘れないだろう。

そして行き着けの美容院の定休日忘れれることも無いであろう。

これがソードマスター角田信朗事件の全貌である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1334y/>

床屋だと思ったらソードマスター角田信朗だった件について

2011年11月16日10時41分発行